

野心と見栄の華麗なる競演

# オードリーエンド・ハウスを征く



ジェームズ1世(在位1603-1625年)の時代、王族の歓待と、一族の権力誇示のため、元々修道院であった建物を大改築して作り上げられた「オードリーエンド・ハウス」。今号では、大改築からおよそ400年を経たこの館を征くことにしたい。

チャールズ二世(在位一六六〇—一六八五)がニューマーケットの競馬場に近しい、という理由により買い取るに至った。王室のものとなったオードリーエンド・ハウスは「離宮」としてふさわしいものに改装されるべく、王室付の不動産鑑定士であり、建築家のクリストファー・レン卿により査定が行われる。しかしながら、レン卿の提示した修復額が一万ポンドだったのに対し、屋敷に当てられた王室の予算は年間五百ポンドのみ。王室がこの屋敷を重要視していないことの表れともとれる低予算ぶりに、到底実現は不可能となった。レン卿もこの状況を鑑み、屋敷に「無用の長物」との烙印を押すしかなかった。

一七六二年、ハワード家の血を引き、初代ブレインリック卿となったジョン・グリフィン・グレイブリン(John Griffin Griffin, 1st Baron Braybrooke 一七一九—一七九七)がオードリーエンド・ハウスを相続する。この頃までに、ジェームズ一世の皮肉が現実となったかのよう、屋敷の三分の二は維持できずに取り壊されていた。ジョン・グリフィン・グレイブリンは、アートや建築など、当時の世界の流行に強い興味を抱いており、先祖伝来の屋敷を現代風に改築しようと一大プロジェクトを立ち上げる。そこで指名されたのが、十八世紀後半、最先端の技術と知識を有し、洗練されたデザインで新古典主義建築を広めた人物として英国中に名を馳せていた建築家、ロバート・アダム。庭園整備には、景観式庭園造りの名手として、引きも切らない依頼を受けていた、ランスロット・プラウン(愛称の『ケイバビリティ』・プラウンの名で知られる)を指名。時代を代表する著名人の二人を指名し、屋敷の大改築を行い、自本色



上・左 エントランス・ホールを抜けてまず最初に通る「グレート・ホール Great Hall」。奥(出入り口ドア付近)の壁に使われているオーク材は17世紀のもの。天井には石膏で模られたハワード家の家紋などが見られ、それらを仕切る梁にも壁同様オーク材が使われている。3代目ブレインリック卿による改築部分。上・右 白、ベージュなどを基調とし、全体的に落ち着いた印象の「サルーン Salon」。17世紀ジャコビアン調を代表する装飾的な石膏天井、18世紀の一族の肖像画、19世紀のカーペットと家具が設えられてあり、各時代のものがそれぞれに調和した部屋となっている。下・左 「グレート・ドローイング・ルーム Great Drawing Room」下・右 「リトル・ドローイング・ルーム Little Drawing Room」。ともに18世紀、ロバート・アダムがデザイン。この2部屋はグラウンドフロアに位置し、どちらも天井がとても低く、建築家、アダムを悩ませる。しかし、彼はこれを逆手にとり、壁、天井、家具を同じ色調で揃え、椅子などの家具も背丈の低いものを置くという「細工」で、部屋全体の圧迫感を最小限に抑えた。

祈りの館から、野心家の邸宅へ

ロンドンからケンブリッジに向かって北東方面に車でおよそ一時間半、エセックス県北部にある素朴な農村地帯、サフロン・ウォルデン(Saffron Walden)に着く。今回取材班が訪れたのは、その小さな村内の西に位置するマナーハウス「オードリーエンド・ハウス Audley End House」。イングランド王、ジェームズ一世(在位一六〇三—一六二五、スコットランド王として一六〇三—一六二五)の時代に基礎が築かれた、ジャコビアン様式(\*)が特徴のマナーハウスだ。オードリーエンド・ハウスの歴史は、一四〇年、サフォーク伯爵のジェフリー・マンダヴィル(Geoffrey de Mandeville)が聖ベネディクト系列の小修道院(Priory)を建てたことに始まる。ローマ・カトリック教会の後ろ盾により、十六世紀初頭まで権力を拡大していき、一五三四年、ヘンリー八世の「宗教改革」により修道院解体が行われ、建物は英国大法官であったトマス・オードリー卿(Sir Thomas Audley, Lord Chancellor of England 一四八八—一五四四)に引き渡されることとなった。一六〇三年、ジェームズ一世の時代に入り、トマス・オードリーの孫で、初代サフォーク卿となったトマス・ハワード(Thomas Howard, 1st Earl of Suffolk 一五六二—一六二六)が、今日まで続く屋敷の礎となる大改築を決定。それまで「ウォルデン大修道院 the abbey of Walden」と呼ばれていた館は、これにより、祖父トマス・オードリーにちなみ「オードリーエンド・ハウス」と名づけられた。

完成の翌年、一六一五年、オードリーエンド・ハウスは、ケンブリッジ訪問の帰路にあつたジェームズ一世をついに迎入れることとなる。ところが、その際、ジェームズ一世がトマス・ハワードに言ったとされるのは、「この屋敷は私には立派すぎるが、サフォーク卿(トマス・ハワード)には良く似合っている」という皮肉めいたものだったという。これはトマス・ハワードと彼の子孫が「立派すぎる屋敷」とともにこれから迎える、複雑な運命をすでに予期しているかのよう、含みのある一言にも聞こえる。大屋敷しかり、王室とのコネを得て、権力を高めようとする行動が人々の目に余ったのだらうか、トマス・ハワードの転落の時はそれから四年後の一六一九年に訪れる。彼は、恐喝、贈賄などの容疑で、妻キャサリンとともにロンドン塔に幽閉されてしまう。罰金七千ポンドで、九日後に釈放されたものの、屋敷の改築に莫大な金額を投じたトマス・ハワードが一人で完済できるはずもなく、彼が一六二六年に死去した後は、子孫に借金を受け継がれていくことになる。屋敷の大改築というトマス・ハワードの『野心』により、ハワード家の子孫は苦しむことになる。が、好意的な見方をすれば、そのおかげで現在の美しいオードリーエンド・ハウスが存在しているとも考えられ、彼の野心に感謝すべき点もあると言える。

『見栄』へと形を変えた、先祖の野心

一六六六年、案の定、荒廃してしまっていたオードリーエンド・ハウスを、ジェームズ一世の孫にして、大の競馬愛好家の

権力誇示!も、家計は火の車

と、桁外れの金額であることから、トマスの抱いていた『野心』がいかに強いものであつたか、お分かりいただけたらだろうか。

## ジャーニーのクラシファイド・アドなら お申込みからお支払いまで

# オンラインでラクラク

### 掲載料はその場で自動計算

通常締切に間に合わなかった方のために、**Express, Super Express** (追加料金がかかります)もご用意しています。

詳細・お申込みはこちらをご覧ください。

## www.japanjournals.com

ご利用頂けるカード

Switch / Maestro / Solo / Delta / Master  
Visa / JCB / American Express

Japan Journals Ltd  
Journey Classified Dept.



## Life below Stairs

# ヴィクトリア時代における縁の下の力持ち

使用人たちの別棟で、貴族社会の裏側を体験

19世紀、ヴィクトリア朝時代、「階下の社会生活 life below stairs」と表現され、支配階級の人々の身の回りの世話や家事に従事していたのは、労働階級（被支配階級）の出身者たちだった。当時、困窮を極めていた労働階級の人々にとっては、支配階級の家への家事奉公に就くということは、住居と食事が確保される「快適な暮らし」の保障を意味していたという。とはいえ、あくまで階下の生活であることに変わりなく、厳しいハウスルールとマナーが存在し、24時間、365日のほほすべてを奉公先の家族にささげなくてはならなかった。今回訪れたオードリーエンド・ハウスは、ヴィクトリア朝時代を陰で支えた彼/彼女ら、使用人の当時の働きぶりが伺える「使用人別棟 The Service Wing」が一般公開されている。英国国内でも珍しいマナーハウスの一つ。1881年当時の状態が復元されており、きらびやかな屋敷内の世界とは異なった、当時の様子を見学できる。

●格付け一使用人といえども、その中で上から下までランクがはっきりと分かれていた。ユニフォーム、食事の場所はもちろん、屋敷内や別棟内で出入りできる場所がランクにより異なっていた。

●給与一オードリーエンド・ハウスでの給与は、他の貴族屋敷に比べて高かったとされている。通常給与に加えて、食事、部屋が保障されているほか、お茶やビール、砂糖なども自由に手にすることができたという。ただ、同一内容の仕事でも男女格差が激しい。(例:1881年、女性料理人のエイヴィス・クロウムの給与は £50 / 年、前任者の男性料理人 £120 / 年 (およそ2.5倍差))

●日常生活一毎朝4〜5時には起床。就寝は家族が寝静まった深夜以降になることも。当然現代のような電化製品はない時代なので、洗濯、調理、洗剤などは、重労働である上、時間を要し、単調さまりないものだった。休暇は基本的に1か月に1度のみ。



オードリーエンド・ハウスの別棟は洗濯室、台所、乳製品調理室 (dairy room) の主に3つのエリアからなる。①洗濯室は乾き物と濡れ物を扱う部屋がそれぞれに分かれている。濡れ物洗濯室 (wet laundry room) には、煮沸用の釜、不衛生から来る伝染病も深刻だった時代、煮沸消毒は重要な行為といえた。②乾き物洗濯室のアイロン。石炭で加熱された鉄製アイロンは、非常に重く上に持ち手も熱く、現代とは比べ物にならないほど使い勝手が悪かったことが伺える。③乳製品調理室。手前には、バター成形用の木べらが並んでいる。④バターを作るために牛乳をかくはする装置。乳製品専門のメイドが使用していた。⑤メインの台所。自然光が十分に入る広いスペースが確保されている。⑥狩猟獲物用貯蔵室。狩猟はプレイブルック卿の趣味で、仕留めた獲物はここで保管された。⑦ゲストに振る舞うために用意されたであろうデザートの色鮮やかなレプリカ。

厳しい上下関係が存在したヴィクトリア朝の使用人の世界。男性はパトラーを筆頭に、女性はハウスキーパーを筆頭に、細かく役割が振り分けられていた。オードリーエンド・ハウスの1880年代は、プレイブルック夫妻2人に対して、30人のお抱え使用人がついており、各自夫妻とそのゲストたちをもてなすために毎日身を粉にして働いていた。①ハウスキーパー、②パトラー: 使用人のまとめ役であり、使用人の作業一切を取り仕切る使用人の中で一番上の地位。③デイリーメイド: 主にバターなどの乳製品を作る担当。中堅職。④スカラリーメイド: 女性使用人の中でも最も身分が低く、野菜、食器洗いなど単調な仕事を担当するメイド。奉公を始めたばかりの十代の若い少女が、ハウスキーパーとパトラーの小間使い。銀食器磨きから、石炭の調達まで、頼まれることすべてをこなす、男性使用人の最下級の職。



週刊ジャーニーは水曜夜にピックアップ可能です!!

設置店の皆様へ  
営業中のご多忙時に「ジャーニー」をお届けし、大変なお手数をお掛けしています。皆様のご協力に心より感謝申し上げます。

週刊「ジャーニー」は水曜日の夕刻までに完成した約3,000部を、そのままロンドン市内中心部にある日本食品店や日本食レストランの一部に配送しています (残りの約8,000部は水曜深夜から木曜の早朝にかけて配送しています)。インクの香りがまだ鼻をくすぐる、まさに出来たてのフレッシュな「ジャーニー」をどうぞお持ち帰りください。

水曜日にピックアップ可能な設置店 (順不同)

18:00~18:45の間の配送  
ジャパン・センター、らいすわいんショップ、ありがとう

19:00~20:30の間の配送  
江戸っ子、りぼん、但馬亭、馳走、菊池、らーめん亮、肴菜亭、さくら、ソーホー ジャパン、てんてん亭、酔処、アペノ、アペノ・トゥー、浅草、出船、どんぞこ、いけだ、カラオケ・ボックス、菊、祭 High Holborn、みさと、みやま (メイフェア)、なんぶ亭、寿司若、東京ダイナー、ともえ、COCORO

ジョン・グリフィン・グリフィンには子供がいなかったため、ハワード家の遠い親戚であった、ネヴィル家 the Neville family が、「プレイブルック」の名を引き継ぎつつ、屋敷を相続していくこととなる。

一八二〇年、三代目プレイブルック卿となったリチャード・ネヴィル (Richard Neville, 3rd Baron Braybroke 一七八三―一八五八) は、研究熱心な人物で、妻ジェーンとともに、屋敷の歴史を研究し、歴史的価値の高さを再認識していく。その過程で二人は、先代のジョン・グリフィン・グリフィンにより新古典様式に様変わりした屋敷に疑問を持ち、もう一度、十七世紀大改築時のジャコビアン様式に戻そうと考えるに至る。親戚のハワード家に対する対抗心も見え隠れするこのアイデアは、リチャードとその妻のやはり「見栄」の表れということになるだろう。こうして新たに建築家を雇い入れ、完成させたスタイルは「ネオ・ジャコビアン様式」と呼ばれている。

今日、残されている屋敷の内装は、この夫妻の趣味によるところが大きいものの、ロバート・アダムが作り上げたジョン・グ

### さらなる見栄っ張り領主登場

に染めようとしたジョンには、トマス・ハワードの野心に満ちた遺伝子が、「見栄」となって現れたといえそう。これにより屋敷内の大部分が当時の流行りであった「新古典様式 Neo Classical」に生まれ変わり、トマス・ハワードによるジャコビアン様式は一時、影を潜める。

ジョン・グリフィン・グリフィン卿が1760年代に屋敷内に作ったゴシック様式の『プライベート・チャペル』。グリフィン一家と使用人たちがここで祈りや交わっていたという。



ヴィクトリア時代に敷地内に作られたキッチン・ガーデン内の温室。様々な野菜が栽培されている。

オードリーエンド・ハウスは、第二次世界大戦時中、英国中の多くのマナーハウスがそうであったように、軍によって接収される。一九四二年五月から一九四四年八月までは、ポーランド将校、兵士らを多数受け入れることとなった。ドイツ軍のポーランド占領に対抗すべく編成されたバラシユート部隊の秘密トレニング場に当てられたのだ。

オードリーエンド・ハウスで訓練を受けた女性性一人を含む三百十六名の勇士たちが、ポーランド本土への着陸に成功したものの、三分の一以上が捕えられ、ドイツ兵による敷地内を流れるケム川は、1760年代にデザインの一部として、流れを『ヘビ状』に緩やかに曲げられ、そこにロバート・アダム設計による石橋 (写真奥) がかけられた。



現在、オードリーエンド・ハウスが戦時中に通った運命を表すものとして、庭にひっそりと佇むモニュメントがあるのだが、この任務と命を落とした百八人のポーランド兵士や将校たちを追悼している。

また昨年一般公開が始まった、ヴィクトリア時代のプレイブルック家を陰で支えていた使用人たちの仕事場「使用人別棟 The Service Wing」も見応えがある。屋敷とはまた違った興味をかき立てられることだろう。屋敷外では、ケンブリッジに続くケム川のゆったりとした流れを中心に、ケイパビリティー・ブラウンの手がけた広々とした景観式庭園を散策し、春の緑溢れる木々の様子をめでて欲しい。

### ポーランドとの『秘密』のつながり

オードリーエンド・ハウスの四百年の歴史は改装の歴史でもあり、野心家のトマス・オードリー、流行を追求めたジョン・グリフィン・グリフィン、オリジナリティに固執したりリチャード・ネヴィルが、それぞれ自分好みに飾り立て、今日のオードリーエンド・ハウスを築き上げてきたといえる。オードリーエンド・ハウスを訪れる際は、これら三者三様の強い個性が、一つ屋根のもとで美しく共存する、屋敷内の様子をじっくりと眺めたい。

### 三者三様の個性が共存する館

壮絶な拷問により命を落としたという。戦後、オードリーエンド・ハウスは、名義はプレイブルック家のままに、英国政府に買い上げられ、一九四八年より屋敷の管理と維持を英国建設省が引き受けるようになる。その後八〇年代から現在まで、その役目を「イングリッシュ・ヘリテージ」が引き継いでいる。

# TRAVEL INFORMATION

Audley End, Saffron Walden, Essex CB11 4JF  
TEL: 01799 522 399  
www.english-heritage.org.uk/audleyendhouse

アクセス  
● ロンドンから車: M11を北上、ジャンクション9AをB184方面に右折。B1383に入りしばらく南下。Spring Hillを左折し、直進すると敷地内に入る。ロンドン市内より約90分。  
● ロンドンから電車: Liverpool Street駅から乗車。約1時間後、Audley End駅にて下車し、タクシーで5分。またはバスと徒歩で20分。

施設 (屋敷と庭園以外)  
● ギフトショップ  
● ティールーム  
セルフサービス形式で軽食ができる。

期間・時間  
● 屋敷  
2009年4月1日~9月30日の水~日曜日 11am - 5pm  
10月1日~31日の水~日曜日 11am - 4pm  
上記期間ともに、土曜日のみ 11am - 2:30pm  
11月1日~3月31日は休館 (一部イベント時は除く)  
\* 時期により屋敷内のガイドツアーにも参加可能。時期は要事前確認。

● 庭園 / 使用人別棟  
2009年4月1日~9月30日の水~日曜日 10am - 6pm  
10月1日~11月1日の水~日曜日 10am - 5pm  
11月2日~12月20日、2010年2月1日~2月14日の土・日曜日 10am - 4pm  
2月15日~2月28日の水~日曜日 10am - 4pm  
3月1日~3月31日の水~日曜日 10am - 5pm

料金  
● 屋敷と庭園のセット料金  
大人 £10.70、子供 £5.40  
● 庭園 / 使用人別棟のみ  
大人 £7.70、子供 £3.90  
\* 11人以上の場合、グループ予約が可能 (15%割引)

